

目 次

□ 吾人の外面生活と内面生活	千葉安良
□ 注意につきて	中島ヒサ
□ 東京と地震	平 静 江
□ 報 告 (その一)	馬 庭 敏
□ 報 告 (その二)	平 井 せ つ
□ 春 の 雪 (和歌)	つ く し
□ 英國よりの初たより	白 菊
■ 雜報 □ 第卅四回文科學術談話會記事 □ 第二回學術談話會總會記事 □ 會計報告	

吾人の外面生活と内面生活 (感想的論文)

千 葉 安 良

1. 緒言
2. 序論
3. 本論
4. 結尾

〔一〕、吾人の外面生活、内面生活とは如何なることが。
 〔二〕、外面生活と内面生活との形式的方面の關係。
 〔三〕、外面生活と内面生活との實質的方面の關係。
 〔四〕、外面生活及内面生活の合理的發達を圖るべきこと。

緒 言

一元哲學の信仰者であり、エネルギー説の學習者である私には、一物に表現する二面乃至多面の相を、悉く絶對の對立をなせる個々別々の現象として取り扱ふことは出来ないが、エネルギーの發相が多面性のものであるといふ事實がある以上、その各面各面が皆確かな實在性を有して居るものである以上、その一面一面を單獨に觀察し研究し得るし、更にその或る一面と或る他の一面との關係を考察することも出来ると思ふ。凡ての科學がそれぞれの獨特の研究の領分を有し、又他の科學との交渉を有する理由は其處にあると思ふ。かういふ見地の上に立つて、私は今、吾人の外面生活と内面生活との關係を考へて見ようと思ふのである。

一、先づ此の外面生活及内面生活といふ語は、どういふことを意味して居るかを明かにする。即ち吾人の外面生活とは、我々が毎日朝起きてから夜寝るまで(實は睡眠中と雖)の間に、我々の身体と精神とを働かせながら、我々の身体を通して身体の外面に表現する所の生活を指して云ふのであつて、内面生活とは、我々の身体を通して行爲として表現しない所の思想や感情や意志の潜在性を指して云ふのである。換言すれば吾人の自我活動が身体の外面に即して働く場合と、身体の内面に即して働く場合とを指して言ふのであつて、その生理的たる心理的たるとの區別は問はぬのである。従つて、ごくわかり易く通俗的に實際生活と精神生活と言つてもよい所ながら、その稱をこらないのである。嚴密に研究思索すれば、生理と心理とは二つに離れて作用するものでなく、又我々の生活のどの方面の發相も我々の自我活動の實際であるに相違なく、我々の生活のどの微細なる一斷片にも、我々の精神力の働らいて居ないことはないものであるから。或は簡單に行ひと心と言つてしまつてもよい所でもあるが、普通、欠伸をするとか念事をするとか、いふ外面生活は行ひと心に入れない傾きがあり、又心といふと空腹の感とか内部痛覺とかいふ内面の生理的生活を含めぬ傾きがある上に、行ひと心の上にはあらはれて來る心の支配と、行とを分離して考へにくい點もある故に、此の語もわざと避けて用ひないのである。

二、處で此頃一部の人は、吾人の生活といふものは、唯一つしかなくて、此の様に二面を立て、吾人の生活といふものを考慮することはできないといふ様に主張して居られるが、勿論初めに言つた通り外面生活といひ内面生活といふことも、それは同一なる自我の活動即ち吾人の生活を、その發動の場所と形式と實質

との相異なるといふ事實に依り便宜上二方面から觀察するのであつて、決して其れ等の人々の非難する様に此の両面の生活といふものを指示して、それを相背反する二生活と見做したり、それに主従の輕重を附したり、或はその一を實生活となし、他を虛生活と斷じようとしたりするのは決してない。

此の兩者は實に互に相錯綜して、殆んど不可分離の密接な關係を持つて居るが、又その一面一面の獨立した實在相を有して居ることは、恰も黑白の絲を以てより合はせた一條の手綱のやうなものであつて、その黒絲と白絲とは相互相纏綿して一條の線を現出して居ると共に、白絲は自ら白絲の實體を有し黒絲は黒絲でやはり自らの實體を有して居ると同じである。更に例を今一層有機的關係を認め得るもの取るならば、今は陽春三月、暖い日の光りを受けて校庭の樹々の梢と云ふ梢には固かつた冬芽が日一日と丸くやはらかくふくらんで行つて居るが、やがてはかはゆい楓の嫩葉も萌えようし美しい櫻の花も咲かうが、此の様にして我々の眼に映る楓や櫻の生長變化は、それを彼等の外面生活と判斷し、その眼に映つる即外面に於ける生長變化を成さしむる樹皮下の幹乃至根に於いての生活はそれらの植物の内面生活と判斷することが出来るが、その植物の内外面の生活は一分一秒の間たりとも離す可からざる密接の關係がありながら、嚴然截然としてその外面生活は外面生活で一貫し、内面生活は内面生活で一貫して居ると同じである。處で、此の植物の内外面の生活の内、その外面生活の方即ち芽がふくらんだり花が咲いたりするのは、養分や水分を供給して呉れる内面生活の結果の表現に他ならぬものゝやうに思はれる。即ち内面生活は因、外面生活は果、といふやうなかたちに見られるが、しかしもう少し進んで考へて見ると、枝や花梗の内部から養分や水分を送られて櫻の花がひらくとしても、その開く爲の必要條件としては、蕾が日光の刺戟を受けて、其の部の細胞に

獨特の作きをあらはして、内面の養分を吸ひあげて自らの成長を成し遂げると云ふことがあるので、かう子細に點檢すれば、養分の吸收輸送といふ植物の内面生活は、外部變化が因を爲して起るものとも見られる。要するに互に因果の關係を爲して居るといふ事になる。我々の内外両面の生活に於いても同じことである。

昨日私は朝五時に母から「もう五時ですよ」と呼び覺まされて「ありがたうございます」と言つて起き上り、髪を結び顔を洗ひ寢床の始末をし食事をすませて、六時少し前に家を出、十二分程の道を歩いて山王下の電車停留所から、舊外濠線の電車に乗つて學校へ六時四十分に着いた。それから午後の三時迄は入學試験を行つた。三時過ぎからその採點に取り掛つて、九時まで學校で同僚と一緒にその仕事を續けて居た。その間には無論晝食も夕食も取つたし、多くの人々と色々な交渉を重ねもした。十時前に家に歸つて暫時家人と談笑を休息してから家内の雜用を一時間程し、入浴したのが十一時過ぎ。それから直ぐ自分の机の前に坐して、此の一篇の前身である草稿をかいては消し書いては消しながら、二時半まで起きてゐて、やつと床に着いたのが三時近くであつた。これは大正五年三月五日に於ける私の外面生活の概略にすぎないのであるが、その間に家族、長上、同僚、教生方、知人、受験者、その附添人など二百人近くの人に長短精粗の別こそあれ、とにかく應待しつゝ居たのだから、かうやつて書き上げて見ると、何だかよほど變化のある事件の多い一日のやうに思はれるけれど、全く私の日常生活の一部分として何でもないのである。そしてこれらの項目の中に含まれて居る一つ一つの事柄によつて引きおこされる内面生活は、一々これ等の外部生活をいき／＼させて居たし、又若干の内面生活が因をなして、その外面生活の中の或物を營まして居たのである。朝、出掛けに見上げた母の姿、「氣をつけておいで」との聲。今朝は三時から起きて居て下さつた、あゝあの白髪、そ

うして私には何が出来るのだらう、何時になつたらその御心も御からだも安らかにおさせ申すことが出来るのであらうぞと、殆んど毎朝の同じ感じを繰返したことから始つて、昨夜のこと、一昨日のこと、去年のこと、彼の人のこと此の人のこと、うれしかつた悲しかつた、をかしかつた、つまらなかつたさま／＼の事柄の回想、さては今日の仕事の豫定手筈の内容を想ひ浮べて繰返して見、手落ちのないやうにと自問自答して見たり、たゞ道を歩いて居たといふ十二分の外表面生活の間に、一々それを茲に書き立てたならば、三四頁は忽ちうづめてしまふほどの内面の心理的生活を行つて居たのであつた。電車の三十分は朝日新聞を讀んでゐたといふ外表面生活につれて、ヴェルダンの圍、南支の動亂、帝國海軍飛行機の粉碎、長崎の降砂さては、小説鬼の面に至るまで種々の記事に、よつて呼びおこされては一々私自身の有する國家觀念、世界觀念、地理觀念、人生觀などを作かせながら、知的作用、感情作用を盛んに行つてゐたといふ内面生活をなして居たのである。これも毎日の同じことである。七時すぎからは續々と押し寄せて來る受験者、その父親、母親、附添人の多くの人々の様々のふるまひの裡に、恩愛、利己、いぢらしさ、洗練、粗野など色々な影を見せられながら、人の運命の流轉の奇妙さをしみ／＼と思つたり、自分の監督する室にすらりと五十人行儀よく席に著いて一生懸命な緊張した顔付きをしてゐる子供達を見た時には、思はずもホロリとして、和らかな氣分でそれ等の子等の祝福を祈つたりした。わづらはしさにあとは記さぬが、かうして外表面生活から内面生活に、内面生活から外表面生活にと、さても忙しい因果の作き。此の日などは内面生活はむしろ單調であつた部類に入る方であるが、それでもすつかり書き記して見たならば、外表面生活よりも、むしろ總計が多くなるだらうと思ふ。何人でも毎日毎日、いろ／＼な外表面生活内面生活を營んで居るのであつて、その内面生活といふも

のが、決して一寸我々の考へる様に實生活に縁遠いものではなく、又外面生活といふものが決して俗っぽいものでもないのであるとしたならば、我々はその何れにも價值評價を平等に與へ、その何れをも尊重しなげればならなくなる。そして又内面生活はよりよい外面生活を惹きおこすものであるやうに、外面生活はよりよい内面生活を導く因であるやうにと、自ら自己を支配して行かねばならぬことを知るのである。以上は吾人の生活の内外両面の關係の形式的方面的考究である。(大正五、三、六稿、未完)

注意 について

私が小學校の敎生で居りました頃、或一人の生徒が、運動場などで見ますとなかなか快活で、敏捷で、生れ付頭がわるい様にも思はれませんが、敎室にはいると、どうもはき／＼いたしませんで、何でもあまりよくわからない様子でしたので、變だと思つて居りました。其の後、他の敎生がその級を敎へてゐるのを參觀した時、つい其の生徒が氣になるものですから、始終眼をつけて居りますと、何か他の事でも考へてゐるのか、時々ぼんやりとした眼付をして居つたり、又、一寸した物音にもすぐ氣をとられる様子でした。丁度算術の時間でしたが、其の内に練習題が出されて、皆、しきりにノートの上に鉛筆を走らせて居ります時、ふと、其の子供が妙に口を動かしてゐるのを見付けました。何を云つてゐるのだらうと氣を付けてみますと折柄、下の音樂堂から面白い唱歌の韻律が幽に流れて居りましたが子供の口はその唱歌と同じ様に動いてゐるのです。私はこれを見つけて一人でうなづきました。

是はたゞ一例に過ぎませんが、普通に劣等生と言はれるものゝ多くは、先づ、心的作用の根本となるべき注意力が生來乏しいか、或は、其の鍛練が足りないか、この何れかの結果であると言つても差支へないと思ひます。先日高等女學校の体操を參觀致しました時、行進中の生徒に氣を付けてみた事がありますが、今自分が行進してゐるのだといふ事を意識して一步一步踏みしめてゐるゐるのは全生徒の $\frac{1}{3}$ あるかなしで